

第24回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

【駿台懇話会の目的】

明治大学と連合駿台会が相互の情報交換と親睦を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与することを目的とする。

1. 連合駿台会学術賞

【社会科学】所康 弘 (商学部准教授)

『米州の貿易・開発と地域統合
—新自由主義とポスト新自由主義を巡る相克—』

【人文科学】須田 努 (情報コミュニケーション学部教授)

『三遊亭円朝と民衆世界』

【自然科学】相澤 守 (理工学部教授)

「Evaluation of resistance to fragmentation of injectable calcium phosphate cement paste using X-ray microcomputed tomography」

2. 連合駿台会学術奨励賞

【人文科学】伊勢 弘志 (文学部助教)

『石原莞爾の変節と満州事変の錯謬
—最終戦争論と日蓮主義信仰』

【自然科学】小山内 崇 (農学部専任講師)

「微細藻類を用いたバイオプラスチック生産法の開発」



連合駿台会報

No.337 平成30年3月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三) 三二九六―四七四七
 印刷 有限会社 美創



(左から) 柳谷孝理事長、所康弘先生、須田努先生、相澤守先生、伊勢弘志先生、小山内崇先生、田村駿会長、土屋恵一郎学長

連合駿台会学術賞・学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会（一月例会）

平成三〇年最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月一八日（木）一七時半より、明治大学アカデミーコモン二階「ビクトリーフロア眺の鐘」で開催しました。

田村会長の挨拶に続いて、学術賞三人および学術奨励賞二人の名前およびその選考経過が発表されました。そして学術賞受賞者の須田努先生（情報コミュニケーション学部教授）の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

*

いま、人文科学・歴史学を

研究すること

―文明開化、三遊亭円朝と民衆世界―

はじめに

連合駿台会学術賞、ありがとうございます。光栄の限りです。経済的効果、地球の環境問題などに、いっさい関係ない嘶家と民衆をテーマとしたこのような研究に学術賞を出すという、明治大学および、連合駿台会の懐の深さに驚くと同時に、ここから感謝いたします。

本日、「いま、人文科学・歴史学を研究す

るということ―文明開化、三遊亭円朝と民衆世界―というタイトルで、三〇分ほどお話ししたいと思います。

わたしは、日本史、とくに一九世紀の社会文化史・民衆史を専門としております。現在、人文科学に対する風当たりは強く、そのことを意識しつつ、人文科学とくに歴史学を勉強・研究することの意義、といった大きな問題をテーマに選びました。

人文科学という研究領域は「へー、そうなんだ、だから何？」という問いかけにさらされています。グローバルな視点からは「What?」ということになります。たとえば、「徳川家康は甘い物が好きだった」ということを検証して、さて、どうするの。ということとです。現在この問題に立ち返る必要性を感じております。

古くさいこと好事家的にほしく返したり、歴史的事実を確定することだけが歴史学の目的ではありません。ではどうするか。今回、学術賞をいただいた『三遊亭円朝と民衆世界』を例としてお話ししたいと思います。

一、『三遊亭円朝と民衆世界』の方法論

まず、この研究の方法論について、簡単に述べてみたいと思います。それは三点あります。

①言語論的転回以降の歴史学 民衆史研究

②個人史 歴史認識と歴史叙述

③主体へのこだわり 覚醒から転変

といったものです。これらを意識し、三遊亭円朝の生涯を文明開化という時代の中に位置づけ、彼の作品を分析し、そこから文明開化期の民衆世界を考察する、ということを行います。

言語論的転回以降の歴史学 民衆史研究

これは、なかなかややこしい問題です。わたしたち歴史研究者は、二一世紀以降の歴史学を「現代歴史学」と呼称しています。歴史的事実（断片的事実）を確定する作業は重要ですが、それはこの「現代歴史学」の目的ではありません。歴史学は認識論の段階に入ったといえます。証拠を示しつつ歴史的事実（断片的事実）を確定した上で、それをめぐって多様な歴史解釈と叙述を行う、というものです。哲学者の高橋哲哉さんは「歴史学をとりまくアリーナ」が形成された、と語っています。そのアリーナで何が問われているのかといえ、歴史・過去と向き合う際の研究者の倫理と立場であるといえます。誰のための歴史を描くのか、ということとです。たとえば、わたしは民衆の立場から歴史を解釈し、叙述するということになります。

この民衆史という領域では、史料の存在がツブに問題でした。民衆は語らない（史料を残さない）のです。そこで、ルポルター

ジュ、フィクション（小説 浄瑠璃・歌舞伎・落語・講談）を積極的に利用しようという動きが起りました。これは、「現代歴史学」の世界的な潮流です。

つまり、フィクションを歴史研究の素材として利用し、民衆の集合心性の様相を考察するということになります。現在のフィクション（テレビドラマなど）に、わたしたちの社会が投影されているように、そこには、当該時期の民衆の心性が表象されていると考えるわけです。ただし、当時の政治的・社会的背景（枠組み）を把握、理解すること、さらにフィクションの作成者の意図を読み抜く必要があります。これを行わないと、単なる印象論、イメージの氾濫ということになってしまいます。それは学問とはいえません。

個人史 歴史認識と歴史叙述

次に、個人史という方法論につき、お話ししようと思います。歴史家の深谷克己さんは『南部百姓命助の生涯』（新版岩波文庫・二〇一六年）の中で、個人史について、

ある個人の生涯から死没に至る一生、人生そのものが、時代のなかにおかれて、どの部分も切り離しえないひとまとまりの生涯として全体的にとらえられ叙述されるところにある。

と語っています。

個人史とは、その人物がいかに偉かった

のかを顕彰する行為ではなく、個人の思想・行動を丹念に復元し時代の中に位置づけ、そこから新たな時代像を形成することを目的とします。『三遊亭円朝と民衆世界』では、三遊亭円朝を素材として、文明開化とは何であったのか、その時期の民衆の心性や意識、つまり、彼ら（彼女ら）の世界とはどのようなものであったのかを考えました。

主体へのこだわり 覚醒から転変

最後に難儀な問題ですが、主体ということに触れておきたいと思います。民衆史を専門としてきたわたしは、大学院生として研究をはじめた時から、主体という問題にこだわってきました。かつて、「戦後歴史学」というデシプリンにおいて、「変革主体」ということが掲げられ、研究の主流を形成しました。当時、わたしは、この「変革主体」という概念にあらがって、発言をしていました。が、まったく相手にされませんでした。そのしんどい中から到達したのが、主体という存在を Subject ではなく agent として認識するというものでした。これを骨子として博士論文を執筆しました。そこから一五年たちましたが、その立ち位置はかわっていません。政治的関心もなく社会との関係も意識せず、日常を流れる、という生き方もありません。もちろん、それを否定するつもりはありません。しかし、そのような諸個人は、こ

で問題とする主体という存在ではありません。現状を分析しそれを相対化して批判する諸個人の問題意識（危機意識）が、その諸個人の行動を規定する、と考え、それを agent として位置づけるわけです。問題はそれを史料からどう抽出し叙述するか、ということになります。今回は、三遊亭円朝という個人を対象として、かれの主体としての覚醒とその後の変遷の様相を叙述しました。

フランスの哲学者アルチュセールは、諸個人は国家（権力）のイデオロギーによる無限の「呼びかけ」にさらされており、その「呼びかけ」に「振り返る」ことにより初めて主体は喚起される、と提起しました。

わたしは、*「振り返る」* 主体の問題をどう受け止めるか、ということにこだわって来ました。現状を分析し、それを相対化して批判する意識をもった諸個人は、一定の経験の下、イデオロギー（権力）の無数の「呼びかけ」の中から、自己の問題意識とシンクロしたものに応じるのです。そこで、主体を agent として理解しつつ、*「振り返る」* その時点を主体の覚醒と位置づけました。さらに、*「振り返った」* 主体はその時点で立ち止まっているわけではない、という理解から主体はさらに行動しつつ、自己を再構築していくと捉え、それを主体の転変として考えてみよう、としたわけです。

二、文明への理解

方法論の開示はこのくらいとしまして、三遊亭円朝が活躍した文明開化期の社会情勢について確認しておきたいと思えます。

文明開化とは

文明開化の時期は、一八六九年（明治二年、戊辰戦争の終結）から、一八八九年（明治二二年、帝国憲法公布）までの二〇年間とされています。

文明開化期の偉大な思想家・福沢諭吉は『文明論之概略』の中で

文明とは人の身を安楽にして、心を高尚にするを云うなり、衣食を饒（ゆたか）にして人品を貴く（たつとく）するを云うなり。

と語っています。

維新の英雄・西郷隆盛は『南洲翁遺訓』でいちいち外国を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、国力疲弊し、人心浮薄に流れ、結局日本身代限りの外、有る間しき也

として、いきすぎた欧化主義の様相を軽佻浮薄と批判しました。

しかし、将来を見通すようなこのような認識は、いったいどれほどの人びとによって共有されていたのでしょうか。

情報コミュニケーション学部三年生のゼミで、福沢の『文明論之概略』を講読史料に

取り上げ、議論を行いました。いったい福沢は誰に向かってこれを書いているのか、ということが問題になりました。もちろん、啓蒙思想家である彼は、読者を限定などしていません。ただし、高度な教養がなければこの書物を理解することは難しいといえます。

近代的義務教育

江戸時代、高度な教育を受けることができた階層は、華族・士族・その他（僧侶・神主など）に限定されます。このような特定の人びとが、福沢が語る文明というものを理解できたであろうと推測されますが、それは当時の人口のわずか七割程度に過ぎません。それでは、九割をしめた平民（民衆）はどうでしょうか。文明という概念を平民（民衆）が理解するためには一定の近代的教育が必要となるのです。

文明開化期とは、国民国家形成期と合致します。日本の歴史の中ではじめて、日本国民というものが創られようとしているわけです。近代国家は、均質な国民を創り出すために教育に力を入れていきます。明治時代の日本も同様です。一八七二年（明治五）、明治政府は学制を發布し、六歳以上の男女に義務教育を施すことを企図します。この壮大な試みは、以下のように文明開化の時期に、紆余曲折をともしつつも進行しました。

一八七二年（明治五） 学制發布

一八七九年（明治一二） 教育令発令

一八八〇年（明治一三） 教育令改正

一八八六年（明治一九） 学校令発令

学制が遵守されたとすると、明治六年に六歳になつてゐる男女（明治元年生まれ）が義務教育の対象となるわけです。天保生まれの伊藤博文や三遊亭円朝は、この時にはすでに四〇歳以上であり、嘉永生まれの明治大学の創立者の岸本辰雄は三〇代、明治の青年と豪語した徳富蘇峰は二〇代です。つまり、彼らが近代的教育＝義務教育を受ける機会はなかった、ということですから、わかりやすく、歴史上著名な人物を事例としましたが、多くの平民（民衆）も同様であつたのです。

近代的実践教育

青年に対する近代的な実践教育は、徴兵制の軍隊で行われました。徴兵制の適用は一八七三年（明治六）からであり、一八五三年（嘉永六）以降に生まれた男子がその対象となりました。嘉永六年以前に生まれた者は徴兵の義務を負わなかつたのです。

つまり、文明開化期に三〇代から五〇代となつた、社会の中核を担う多くの平民（民衆）は、小学校での義務教育も軍隊での実践教育も受けなかつた、ということなのであり、彼ら（彼女ら）が、文明・近代といったことを考える公的機会はなかつたのです。この事実、文明開化という華々しいイメージ

のなかで希薄になっています。

三、明治政府のイデオロギー統制

アルチュセールに再び登場してもらいます。彼は、学校にかぎらず劇場も国家のイデオロギー装置であると論じました。

寄席への介入

国家のイデオロギー装置という視点で、明治政府の政策、法令・条例を確認していくと、文明開化期を通じて、明治政府は大衆芸能の場、寄席に介入統制していたことがわかります。政府は大衆芸能の場を、「国家に益なき」としつつも、くだらぬ猥雑な空間として捨て置いていたわけではなかったのです。『朝野新聞』一八八六年（明治一九）四月には

無智無学なる下等人種の風俗を改良するの方便は一にして足らずと雖も都会に在ては演劇講談落語人情話等を以て最も早手廻しとす

とあります（このような内容をもつ史料は多くあります）。つまり、明治政府は、小学校での義務教育、徴兵制軍隊での実践教育の両方を経験できない膨大な数の平民（民衆）を教化・指導する場として寄席を位置づけていたのです。

教導職・円朝

それでは寄席に登場していた芸人（噺家）

はどうでしょうか。明治政府は一八七二年（明治五）、国民教導のために著名な「三条の教則」を発令し、円朝を教導職に任命、「必ず一席の内に婦女子への教訓になる話を雑へる様に」と命じました。当時、円朝は東京の上等の寄席に出演していました。その客は、中流以上の東京「市民」や、独身の職人・職工であったと考えられます。芸人は、国民教導の尖兵となったのです。円朝はこのことを強く自覚していました。

四、暴力の記憶

前置きが長くなりました。それでは、本論に入ります。現在、「古典落語」と呼ばれるものは、滑稽な落し噺（「時そば」など一〇分程度のもの）が主流となっています。一方、円朝が創作したものは、怪談噺・人情噺といわれる三〇分以上の長い作品で、五日から六日間の連続物として語られました。そこでは、怪異・幽霊、敵討ちの場面が描かれてきましたが、噺の本質は、幽霊・暴力と私慾の世界であったのです。以下は今回、分析対象とした作品です（漢数字は創作年）。

「真景累ヶ淵」一八五九年（安政六）：

「怪談牡丹燈籠」一八六一年（文久元年）：

怨霊よりも現世の私慾と暴力の世界

「鏡ヶ池操松影」一八六九年（明治二）：容赦のない暴力

「英国孝子ジョージスミス之伝」一八八五年（明治一八）：連鎖する暴力

「敵討札所の霊験」一八八八年（明治二二）：非情な暴力、サイコパスの登場

「業平文治漂流奇談」一八七九年（明治一二）：粗暴な主人公 暴力によるトラブル解決

暴力の空間

これらの円朝の噺には公権力がほとんど登場しません。暴力的な犯罪をとりしめる警察権力が登場しないので、トラブルは民の間での暴力によって解決されていくのです。そして、円朝の暴力に満ちた噺の最後は、敵討ちや幽霊の登場によって「悪党」は滅ぶという勧善懲悪となっています。わたしは、この問題を考えてみました。

暴力が行使される空間には、通常、加害者・被害者、そして傍観者（野次馬）がいるわけですが、円朝の噺には傍観者が登場しません。ゆえに、彼等が公権力に通報するということはないのです。閉じられた暴力の空間で、被害者は殺害されます。すると、その家族が敵討ちを行います。家族がいない場合、殺害された本人が幽霊（怨霊）となって「うらめしい」と出てくるわけです。そこには、公権力の入り込む隙間などないのです。

このようなドラマ設定に、一九世紀の社会状況が投影されているといえます。天保期から幕末期までの約三〇年間、社会は不安定

になり、秩序・治安も悪化していました。民衆は公権力に不信感を抱き、期待すらしていませんでした。明治時代となり文明開化期に至っても、そのことが人びとの記憶に残っていたのです。

江戸の記憶は、甘美なノスタルジーなどではなく、暴力と私慾の世界を投影したものでした。これそが民衆の集合心性を形成していたのではないのでしょうか。

五、円朝・主体の覚醒

先に述べたように、明治政府（国家）は円朝を国民教導に利用しようとした。円朝の立場からこれを位置づけると、円朝はその「投げかけ」に応えつつも、それを独自に解釈し、芸人・噺家・三遊派の社会的ステータスの上昇につなげようとした、という評価が成り立ちます。円朝の主体は覚醒したわけです。そして、彼は一八七八年（明治一一）「塩原多助一代記」を創作します。

覚醒した円朝、しかし……

江戸時代・寛政期に塩原太助（多助）という人物は、分限者として実在していました。円朝は、多助の成功を「忠義・孝行」の実践にあるとし、それを近代・明治の教条に転化させ、「正直と勤勉」は立身出世の資本（もとで）になると語りました。このような嘶には幽霊も敵討ちも出てきません、ストー

リーは平板で面白くないものとなってしまいました。

一方、この嘶が寄席にかけられているころ、大蔵卿・松方正義によるデフレ政策（松方デフレ）が始まり、大不況が到来します。没落農民は都市に押し寄せ、貧民窟を形成します。一度転落した貧困からは抜け出すことなど不可能である、という現実が到来したのです。「正直と勤勉」は、立身出世の資本などにはならないのです。円朝の嘶・芸は現実と乖離した、説教くさいものとなり、客は円朝から離れていきます。

六、差別の記憶

次に、しんどい、重い内容に入りたいと思います。一八七二年（明治四）、明治政府は以下のような太政官布告を出しました。いわゆる「身分解放令」と呼ばれるものです。

穢多非人等ノ称被廢候條、自今身分職業
共平民同様タルヘキ事

「身分解放令」の目的は人道・人権的なものではなく、徴兵制・税制の確立にありました。これに対して、全国で解放令反対を唱える一揆が発生しました。一八七三年（明治六）の美作血税一揆では、農民達が被差別部落民（もと穢多）を襲撃し、三〇名以上の死傷者を出しています。

「身分解放令」が発令された後、文明開化期

においても、もと穢多は実質的な居住制限の下にありました。差別意識は強固に残り続いていたのです。

不確かとなった差別の記憶

一八八六年（明治九）、円朝は「蝦夷錦古郷之家土産」という嘶を『やまと新聞』に連載しました。舞台は幕末の江戸と信州・関東です。この嘶には、江戸の被差別民（穢多・非人）が登場しています。差別がテーマとなっているのです。ところがどうしたわけか、従来の円朝の先行研究・評論・解説はこの点にまったく触れていません。後世の研究者・評論家によって、円朝の差別の記憶は消されてしまったといえます。わたしはこの嘶を分析してみました。

江戸時代、穢多と非人とは身分制度の上で、明確な区別がなされていました。しかし、この嘶では両者が混同されて出てきます。円朝は、弾左衛門（穢多頭）と親交があった松本良順（幕府陸軍軍医）から、穢多制度に関する知識を得ています。しかし、生活実態や細部に関しては、非人と穢多の混濁が起こっているのです。これは、円朝に限らず、文明開化期、東京の民衆の記憶の様態であり、不確かとなった差別の記憶といえます。ただし、円朝は、彼らが触穢も含めて、ひどい差別の下に置かれていた、その様相を詳細に語っています。

七、円朝・主体の転変

先に、「塩原多助一代記」を紹介した場面では、円朝の認識と現実社会との乖離を問題としました。これは、教導職としての意識が強すぎたから、といえるでしょう。「蝦夷錦古郷之家土産」では、時代を見据えた円朝の姿を見ることが出来ます。

近代差別の習俗への批判

松方デフレの時期、東京などの巨大都市には貧民窟が形成されました。松原岩五郎の『最暗黒之東京』というルポルタージュには、「東京の貧民窟は各種雑芸能のつぼ」とあります。そして、「不確かとなった差別の記憶」と松方デフレによる都市最下層民への冷酷な眼差しとが混ざり合い、「近代的な差別の習俗」が創られていきます。

資本主義の冷徹な法則の下、貧困とは怠惰の結果であり、敗者の証とされ（江戸時代には決して起こらなかった発想です）、さらには、不潔と同義と認識されていきます。都市最下層民は近代社会から差別されていくのです。円朝はそれを見ています。

「蝦夷錦古郷家土産」には、

天子でも將軍でも矢張、天地間に生まれた人である。一体小屋者だの穢多だのと云ふ隔てを付けたのはオカシナ話
しだ

という台詞が出てきます。ここに円朝の思い

が込められています。

円朝は、教導職（政府による国民教化の尖兵）のままでいたわけではないのです。円朝の主体は転変していきます。円朝は松方デフレという政府の政策により、文明開化期に新たに形成された“近代的な差別の習俗”を痛烈に批判しているのです。

おわりに

一九八〇年代、「戦後民主主義」に対する疑問から、大正デモクラシーの見直しが起こっていました。大正デモクラシーとは、都市だけの物語である、ということでした。事実、同時代の地方農村部では、ファシズムが深く静かに拡がっていました。

また、九〇年代に入ると、明治という時代の捉え直しも始まりました。民衆は近代・文明などを求めていないのではないか、反近代の意識が強いのではないか、という研究です。ところが、文明開化という現象に対する問い直しの動きは起こりませんでした。あまりにも福沢諭吉の影響が強かったと言えます。歴史研究者は、文明（理想）への課程をたどる時代風潮は批判しえない、と認識してしまつたのです。

民衆史を専門とするわたしは、近代・反近代というわかりやすい対立軸、二元論に疑問を感じていました。政治史では、江戸時代と明治時代とを当然ながら区分します。しか

し、当時生きていた人びとにとっては、江戸時代から明治時代とは連続するものであったのであり、天保に生まれた人びとが、幕末の動乱を経験し、文明開化の時代に生きていたのです。民衆の心性は複雑なのです。

円朝をつうじて、文明開化の民衆世界とは、江戸の記憶と近代化を受け入れる意識がないまぜの状態であった、ということ提起してみました。そして、そこには、根強い暴力・差別の意識があり、「近代的な差別の習俗」も新たに創られていったことも明らかにしました。

ただし、本日、時間の関係から、円朝の作品の内容を具体的に紹介することは出来ませんでした。円朝の創作癖は「お笑いを一席」という滑稽話は少なく、長い癖が多いので、寄席ではなく、ベテランの噺家さんの独演会でかけられることがあります。また、岩波文庫や、岩波書店の『円朝全集』で読むことができます。ぜひ、その世界を覗いてみてはいかがでしょう。

『三遊亭円朝と民衆世界』では、なぜ暴力と差別といったことを問題としたのか、ということになります。身も蓋もない、暗い近代をことさらに描きたかつたわけではありません。暴力が非暴力かという単純なわかりやすい二元論ではなく、普通の人（市民）が、ある一定の条件の下において、暴力を行使する

ということが問題なのです。そして、他者を差別するという意識は、時代を超えてつねに(新しい形をとり)存在している、ということとを認識する必要があるのです。円朝はわたしたちに、それを問いかけていたのではないのでしょうか。

他者と多様性を認め、暴力と差別を否定すべきものと認識し、それらが現れないように押さえ込む力は教養にほかなりません。

現在とは、歴史の積み重ねである(その課程には誤った選択もあったかもしれない)、ということとを認識し、現状を相対化して、よりよい未来を模索し、それに向かう多様な選択肢を用意することも教養といえます。人文科学、歴史学とは、過去の出来事を根掘り葉掘り講釈する後ろ向きの好家的なものではなく、現代につながるものとして過去を認識し、未来を模索しうる思惟の力を養うための学問なのです。

最後に一言触れておきたいことがあります。土屋学長は明治大学を「研究大学としてNo1に」と、熱く語っています。三〇年前、教えをうけた歴史学者の木村礎先生は若いわたしたちを相手に

「学の明治」にしなければ

と語っていました。わたしは、一〇年前に母校・明治大学に奉職しました。研究の明治「学の明治」はわたしの夢です。そのために、

自分らしい、わたしにだけできる研究を、楽しみながら続けていきたいと思えます。

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(到着順・敬称略)



谷川 薫
昭和五十六年・工学部卒
兼松(株)代表取締役社長
東京都千代田区在住



江崎 徹
昭和五十八年・商学部卒
(株)はせがわ代表取締役社長
千葉県千葉市在住



宮嶋 優光
平成十二年・経営学部卒
(株)ジヤパンスポーツ代表取締役
東京都調布市在住



内木 祐介
昭和五十九年・政経学部卒
ポストン・サイエンティフィック
ジャパン(株)代表取締役社長
神奈川県横浜市在住

◆明大ニュース

●二〇一八年度一般入試

四年連続志願者増、十二万人の大白確実に

明治大学の二〇一八年度入学試験は、三月二日に出願締切となった大学入試センター試験利用入試(後期日程)など一部を除き試験日程を終えた。特別・推薦入試を除く一般入試の志願者数は二月九日の時点で十一万九千七百八十五人。四年連続で志願者数が増加し、十二年連続で十万人を超えた。最終集計は十二万人の大白が確実な情勢となった。

二〇一八年度入学試験では、全学部において入学定員を変更したほか、文学部に哲学専攻が新設。商学部、経営学部、国際日本学部の一般選抜入試では、英語4技能を用いた試験方式が実施された。入試種別ごとの志願者数では、各学部が実施する「一般選抜入試」が前年度比四・五%増の六万三千四百十六人。昨年に続いて全体の志願動向が、文高理低の傾向となり、経営学部をはじめ文系のすべての学部で志願者数を伸ばした。

本学キャンパスと全国六都市(札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡)が会場となる「全学部統一入試」は二月五日に実施。志願者数は同九・五%増の二万六千六百二十二人で、二〇〇七年に導入して以降、最多を記録した。

「大学入試センター試験利用入試」前期日程の志願者数は、同七・〇%増の三万四千七百四十七人。後期日程は、商、理工（機械工学科を除く）、総合数理の三学部で三月二日まで出願を受け付け。明治大学の最終志願者数は三月上旬～中旬に確定する。

●「和泉国際混住寮(仮称)」地鎮祭

二〇一九年春開設に向け着工

明治大学の国際化の推進と共創的学習・教育の推進の一環として、二〇一九年春の開設を予定している「和泉国際混住寮(仮称)」の地鎮祭が一月二十五日、建設地である和泉キャンパスC地区(旧N.T.T和泉町社宅解体地)で執り行われ、地権者として柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長はじめ大学役員・役職者が参列。事業主の(株)共立メンテナンス、施工を担当する(株)福田組、設計監理を担当する(株)石本建築事務所、設計監修を担当する(株)共立エステートとともに工事の無事を祈願した。

直会のあいさつに立った柳谷理事長は、第二期中期計画に基づく国際化施策を明らかにした上で、「国際混住寮はアジアのトップユニバーシティを目指す本学にとって期待のドミトリ。留学生と日本人学生が共に生活し学ぶ場は、国際化の牽引役になる」と述べ、事業者らに対して引き続きの協力を訴えた。

続いてあいさつした土屋学長は、着工の

喜びを語るとともに「この国際混住寮を起点に和泉キャンパス全体をグローバル・ヴィレッジ化し、アジアそして世界に発信していきたい」と今後の展望を語った。

国際混住寮は、外国人留学生と日本人学生が学習スペースや交流スペースを共にしながら生活し、国際コミュニケーションを形成していく「学びの場」がコンセプト。六つの個室がリビングや水回りをシェアするユニット・タイプ(6室1ユニット)からなり、総定員は二百十六人。外国人留学生はもちろん、日本人学生に対する国際的な教育環境のさらなる充実を図っていく。

●連合駿台会

五研究者に「学術賞・学術奨励賞」を贈呈

連合駿台会は一月十八日、第二十四回連合駿台会学術賞・学術奨励賞を発表し、商学部の所康弘准教授、情報コミュニケーション学部の須田努教授、理工学部の相澤守教授に学術賞を、文学部の伊勢弘志助教、農学部の小山内崇専任講師に学術奨励賞をそれぞれ贈呈した。授賞式に先立ち、学術賞受賞記念講演会が駿河台キャンパス・アカデミーコモンで開催された。

あいさつに立った連合駿台会・田村駿会長は、同賞設立の経緯を紹介するとともに、「さらに精進して明治大学の発展のために大いに

尽力していただきたい」と受賞者を激励。続いて、受賞者代表の須田教授が「いま、人文科学・歴史学を研究すること——文明開化、三遊亭円朝と民衆世界——と題して講演した。明治時代に活躍した落語家・三遊亭円朝について、歴史学・民衆史の観点から解説するとともに、円朝の作品に登場する「暴力と差別」について言及。「教養とは、多様な選択肢を認め、他者を尊重すること。このことを語り継いでいくことが、歴史学ひいては人文科学の今後の役割だ」と締めくくった。

会場を移して行われた授賞式では、土屋恵一郎学長から賞状、田村会長から記念品が手渡された。これを受けて受賞者五氏は、「明治大学とラテンアメリカの懸け橋になれるように尽力していきたい」(所准教授)、「学長がおっしゃる『研究の明治に』というのは私も夢」(須田教授)、「将来、研究成果が世の中の役に立てばという思いで日々取り組んでいる」(相澤教授)、「地味な研究もしてきたが、賞をいただき報われたという思い」(伊勢助教)、「受賞はゴールではなくスタート。ますます頑張りたい」(小山内専任講師)と、それぞれ関係者への感謝を述べるとともに、今後一層の活躍を誓った。

●OB社長

▽大阪市高速電気軌道(株)河井英明氏(一九

七七年経営学部卒・六十三歳、四月一日
就任予定)

▽三井化学アグロ(株) 小澤敏氏(一九八五年
商学部卒・五十六歳、四月一日就任予定)

●OB町長

▽茨城県阿見町長(二月十八日投開票)

千葉繁氏(無所属①、二〇一七年専門職
大学院ガバナンス研究科修了・五十五歳)

●サッカー日本代表長友選手 母校でトークイベント

サッカー日本代表として活躍する長友佑
都選手(二〇〇九年政経卒)が一月十一日、
駿河台キャンパスを訪れ、明大生向けのトー
クイベントを実施した。会場を埋め尽くした
後輩たちの大きな歓声の中登壇した長友選手
は冒頭、六月に開催されるFIFAワールド
カップ・ロシア大会への意気込みについて聞
かれると、「前回のブラジル大会での惨敗で
負った大きな傷は、ワールドカップで結果を
残すことでしか癒すことができない。チーム
の勝利に貢献したい」と強い決意を示した。

また、夢の実現に関する話題については、
「夢を叶えるための信念は誰にも負けていな
い」と断言。世界トップレベルの選手たちと
日々競争し、日本代表として一〇〇試合出場
を達成するなど常に高い次元で努力を続けて

いることに触れ、「常に弱い自分と戦ってい
る。己に勝ち続けなければ目標は達成できな
い」と強いメンタルを維持することの重要性
を説いた。

その後も、学生時代や海外での生活、プ
ライベートなど数々のエピソードを披露し、
学生からの質問にも笑いを交えながら真摯に
応対した長友選手。最後は自らの経験を踏ま
えながら「大学四年間の仲間との出会いや人
脈は今後の財産になる。夢や目標を持って自
分を成長させていってほしい」と後輩に向け
エールを贈り、締めくくった。

長友選手の一時帰国中の合間を縫って開催
されたイベントは、会場のリバティホールが
満席となり、急きょ別教室での同時中継が行
われるほどの盛況ぶり。明大生約九百人が来
場した。先輩のメッセージを間近で聞いた学
生は「留学を控えているので、世界で戦う長
友選手の話聞くことができてよかった」と
興奮気味に話し、大いに刺激を受けた様子
だった。

●大学史資料センター&阿久悠記念館 トークイベント「父を語る(承前)」開催

明治大学史資料センターは一月二十日、
トークイベント「父を語る(承前)」を同セ
ンター所管の阿久悠記念館内で実施した。同
館で開催中(二月二十五日終了)の特別企画

展示「阿久悠と上村一夫」との連動企画。

作詞家・作家阿久悠氏(一九五九年文卒)
と、漫画家・イラストレーター上村一夫氏
(一九四〇〜一九八六)は深い知友であり、阿
久氏シナリオ・上村氏作画による漫画「悪魔
のようなあいつ」(一九七五年)など多数の
共作を発表した。昨二〇一七年は両氏のそれ
ぞれ作詞家・漫画家デビュー五十年にあたっ
たこともあり、今回のイベントが企画された。

阿久悠記念館運営副委員長の富澤成實政
経学部教授によるあいさつの後、深田太郎氏
(株阿久悠、阿久氏長男)と、上村汀氏(上
村一夫オフィス、上村氏長女)が登場。話題
は阿久氏と上村氏の生誕、青年期、広告代理
店・宣弘社での出会い、その後の漫画共作や
交流に関することから、上村氏が重要な役割
で描かれる昨年放送のテレビドラマ「時代を
つくった男 阿久悠物語」、上村氏のイラス
トがジャケットに採用されたレコード会社七
社共同企画「阿久悠メモリアル・ソングス」
まで、没後にもまだに話題の絶えない、時代
を創ったクリエイターである両氏について深
く熱のこもった対話が行われた。

満員の聴衆で埋め尽くされた会場は、対話
に熱心に聞き入るとともに、小冊子や特製カ
レンダー等、深田・上村氏提供のプレゼント
に沸く一幕もあり、盛況のうちに閉会となっ
た。

●スポーツ奨励奨学金

明大トップアスリート百五十九人に給付

スポーツで卓越した成績を収めた学生に対する「明治大学スポーツ奨励奨学金」の一七年度採用者がこのほど決定し、体育会三十五部・百五十九人に給付された。

この奨学金は、スポーツと学業の両立を促し、本学のスポーツ活動のさらなる活性化を推進することを目的に、体育会各部の所属学生に与えられるもの。優れた競技成績や「文武両道」の実績があり、かつ経済的支援を必要とすることが採用条件となる。給付金額は授業料年額相当額または授業料年額二分の一相当額。

●第二十二回 植村直己冒険賞

北極冒険家の荻田泰永氏が受賞

第二十二回「植村直己冒険賞」の受賞者発表記者会見が二月十六日、駿河台キャンパス・紫紺館で行われ、北極冒険家の荻田泰永氏が受賞した。

これは、世界的冒険家である故・植村直己氏（一九六四年農卒、山岳部OB）の精神を継承し、自然を相手に創造的な行動・業績を表彰することを目的に、植村氏の出身地・兵庫県豊岡市が実施するもの。

荻田氏は二〇〇〇年に大場満郎氏（第四回植村冒険賞受賞）に付いて初めて北極を訪

れ、これまで十五回の北極行を経験。そこに住むイヌイットの人々の文化や歴史、野生動物などに関心を深め、北極圏各地を九〇〇〇km以上移動してきた。外部から物資の補給を受けることなく（無補給）単独徒歩で、これまでに北極点を目指し二度断念するも、地球の両極地を歩いてみたいという思いから南極行に挑戦。二〇一八年一月に日本人初の南極点踏破を達成した。

受賞に際し荻田氏は「十八年前に大場さんが植村賞を受賞する姿を間近で見ていたので、今この席に僕が座れているのが不思議な感覚」と喜びの表情で語った。また植村さんについて聞かれると、「お会いしたことはないけれど、冒険中行く先々で植村さんの人間性をたたえる話を聞いた。各地で植村さんが信頼関係を築いてくださったおかげで、今自分もたくさんの人に助けてもらいながら冒険できている」と感謝を述べた。

●ラグビー部

国際交流マッチでシドニー大学と対戦

体育会ラグビー部は二月十一日、八幡山グラウンドでオーストラリアのシドニー大学ラグビー部との国際交流マッチを行った。

これは、学生の国際交流における経験の機会とラグビースキルのレベルアップを目的に企画されたもの。試合は38対56と惜しくも

敗れたが、一八六三年創部のオーストラリアの強豪相手に、三年生以下のメンバーで善戦。新年度に向けて手応えを感じさせる試合展開となった。ノーサイド後には両チームのメンバーが円陣を組んで健闘をたたえあい、場所を移してウエルカムパーティーも催されるなど、両チームは親睦を深めた。

二月十七日には、トップリーグで活躍するOBメンバーを中心としたオール明治大学とも交流戦を実施。こちらは40対12と、明大ラグビー部OBの層の厚さを見せつける結果となった。三月十七日には、アメリカ・イェール大学との試合も予定されている。

◆駿台トピックス

●新入会員が会長ら運営担当者と交流

母校の勢いに呼応するように、このところ入会者も順調に増えていますが、定例会だけでは出席の機会も限られる新入会員をお招きする恒例の「新入会員歓迎会」が、二月七日午後六時から紫紺館で開かれました。

参加者はこれまでで最多の十六人。会長、専務理事と五委員会の委員長で構成する運営委員会メンバーと、約二時間、親しく交流、懇談しました。中には会の活動に初参加という方もおられただけに、「会のことがよく理解できたし、これを機会に……」と皆さまにも歓迎していただきました。

新入会員参加者は以下の方々です(敬称略)。

井上欣也、内川雄一郎、浦川竜哉、大槻哲也、奥岡征彦、鬼塚和也、金井健、河原章、近藤健、三枝富博、上口裕司、鈴木章浩、二井康夫、畠中君代、幡谷公朗、渡邊和男

◆駿台懇話会出席者

○明治大学ご招待者

柳谷孝、土屋恵一郎、中村義幸、鈴木利大、荒川利治、林義勝、平井克彦、荒川薫、井田正道、小川知之、飯塚浩司、鈴木一弘、福岡英朗、関谷俊郎、笠松浩義、小笠原渉、所康弘、須田努、相澤守、伊勢弘志、小山西崇、福田邦夫、渡邊友亮、古谷英二、武野純一、森久、友野典男、渡浩一、中村肇

(敬称略)



○会員出席者

相澤淳一、青木幹則、青柳勝榮、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、安達明正、飯田和人、石川かおり、伊東正博、井上欽也、同ご友人、伊原敏雄、岩田守弘、上西紘治、同ご友人、宇川一夫、潮田伊佐夫、内川雄一郎、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、奥村勝広、尾暮敏範、鬼塚和也、金子光男、狩野省市、栢森靖、菊部彰夫、河合陽一郎、河村博、神林光、草木頼幸、小嶋修司、小林一健、五味道雄、小山修、根田哲雄、根田吉雄、近藤健、斉藤弘之、坂田英夫、笹田学、佐藤健、佐野公哉、佐野径、志村康洋、杉浦伸二、関根均、瀬戸正道、相臺志浩、高澤徹、武内裕、竹下衛司、武田宣夫、田代恭一(代理)、田村駿、当山明彦、徳丸平太郎、中川敏洋、中里猛志、中根武、西澤豊、長谷川進一、原田榮、深代尚夫、福田和彦、藤巻伴英、前川一郎、松崎優子、向井眞一、村岡健、山口政廣、山田朝彦、渡邊和男

【編集後記】

季節は廻り、待望の暖かい春が訪れ卒業式シーズンのようです。われらが明治大学の卒業式は、本年度も九段の武道館にて三月二十六日に行われるとのことで、とてもおめでたいことです。卒業生、ご父母、ご家族の皆様、「ご卒業おめでとございます」。ところで、皆さまは卒業式を覚えていらっしゃいますか？

先日、ある都内の高等学校の卒業式に臨席してきました。最後に「送別の歌」として「蛍の光」、続いて「感謝の歌」として「仰げば尊し」を歌いました。ところが最近、この二曲はあまり歌われていないとのこと。検索してみると、平成の初頭までは定番だったようです。四十路の後輩に尋ねたところ、「知らない」とのこと。それではということ、受験情報「蛍雪時代は？」と付け加えたところ、同様の返答でした。時代の流れを感じるとともに、まだ若い！と思っていた自分が実はそうでもなかったのだと思わざるを得ませんでした。今でもこれらの曲を聴くと目が潤みます。「仰げば尊し」の一節に「身を立て 名をあげ やよ 励めよ」とあり、民主的でないと思われる方もいらっしゃるようですが、まだこの域に辿り着けていない自身を鼓舞し、「まだまだ修行が足りない、頑張らなくては」と奮い立たせられる曲です。古いかもしいれなくとも「良いことはよい」。陳腐化しない「良いこと」は、残ってほしいなと思います。四月に入ると明治大学も新入生を迎え、また新しい時代がつけられていくことでしょう。もちろん新しい考え方もあるでしょうが、長い歴史の中でつくられてきた良き伝統だけは体得して卒業してもらえたら、嬉しいことです。「がんばれ卒業生」 (大石哲也)